

るの語に係るもので、我が國に來舶した濫觴ではない。且つ天皇の特に之を悦び給うたのは、使人が暴風に遭ひながら生命を全うしたことであつて、當に彼等の著岸を祝し給うた許りではなかつた。高麗との交通路は古へより九州であつたが、今次始めて越に來著したといふ文は、毫も疑を容れる餘地がない。その肅慎を指すといふ如きは何の根據をも見ぬ。

(三)道君に關する異説—大日本地名辭書は、この條の道君を高志深江國造たる道氏であるとなし、國造本紀所載の加宜國造たる道君は夙く亡び、仁徳の朝に三尾君が代つて賀我國造であつた。然らば高麗人來朝の時、賀我に道君はないといふのである。しかし吾人は國造本紀の賀我國造の條を否認するものであり、且つ加宜國造であつた道君は毫も衰亡せざることを、樂樂朝に於いて加賀郡の大領又は主政に道君があつたので知られる。大日本地名辭書所引史學雜誌に、又欽明紀を引いて、

その越國は後の古志郡で、佐渡の對岸ならざるべからずとしたも、同一の誤謬である。道君の族が越後・佐渡に繁衍したことは事實であるが、江沼臣がその罪狀を知つて彈劾した道君は、しかく遠距離であつてはならない。

コマセン 駒錢 馬匹税である。天正十五年二月十七日羽咋郡の駒錢を一匹八百文と定めたなど、見える。

コマタ 小又 鳳至郡南北郷に屬する部落。

コマタ 小又 鳳至郡北河内の内の小字。

コマタ 小又 鳳至郡甲の内の小字。

コマタガハ 小又川 鳳至郡に在つて、一に穴水川ともいふ。桂谷の東南から發し、東

北流して丸山・下唐川・挾石を經、小又の南方一軒あたりから東南に折れ、河内の東南に出で、宇留地を經て山王川を入れ、東南に流れて穴水灣に入る。流程一九軒。

コマタダニ 小又谷 能美郡風嵐の部落南方の溪谷で、その水明谷のそれと合し、牛首川に注ぐ。

コマチ 小町 鳳至郡七浦庄に屬する部落。明治中に至り、黒杉・新保・上・雜座・池田と合併して上山と改稱した。

コマチガハ 小町川 鳳至郡小町領山から流出し、西二又領で上大澤川に落合ふ。落合までの流程二軒二許。

コマチヨ 小間千代 羽咋郡酒見にコマチヨと稱する一民家があつた。世々姓を藤原、名を小間千代といひ、名族の後裔であるといはれて居た。

コマツ 小松 (一)沿革—能美郡小松は、梯川に據せられて、城郭を構へるに勝地であつた。是を以て一向一揆の首魁にして早く居館を置いたものがあるやうであるが、今明證を得ぬ。天正中柴田勝家この地を取り、八年信長の命によつて村上頼勝の封ぜられるに及んで、初めて城郭の規模を備へ、後慶長二年には丹羽長重の居る所となつた。五年前田利長之を陥れて、徳川氏の加賜する所となり、寛永十六年前田利常菟裘をこゝに營み、城郭殿宇極めて壯大となつた。萬治元年利常薨じたが、その設備尙撤去するに至らず、若干の士を留め置き、儼として一藩一城の制外に在つた。加賀藩亦特別の施政をなし、絹織物・製茶・製陶等の産に富み、城下の繁榮殆ど舊に異ならなかつた。

(二)郷庄—越登賀三州志國譜村籍に、小松町は苗代郷・輕海郷・粟津郷の入會としてある。又能美郡名蹟誌には板津郷だとする。(三)町名—小松町に於ける明治五年十一月の町名は左の通であつた。

茶屋町 新町 泥町 細工町 松任町 松任町地方 新鍛冶屋町 竹島 材木町 地子町 中町 中町地方 京町 小馬出町 濱田町 濱田町地方 向野地方 西町 新大工町 寺町 本鍛冶町 塗師屋町 大文字町 本大工町 龍助町 八日市町 八日市町地方 上本折町 本折町 三日市町 三日市町地方 東町 土居原町

右の内、明治中松任町地方を松任町に、竹島を小馬出町に併合し、大正五年には東町の一部を削いて怡屋町とした。

コマツイナリシヤ 小松稻荷社 ↓ゴコクジイナリシヤ 五穀寺稻荷社。

コマツウマハリ 小松馬廻 寛永十六年前田利常小松城を菟裘と定め、同年八月三日之に従ふ御馬廻二十四人を命ぜられたが、以後交替等によつて人名は同じくない。組分もあつたと見え、利常薨去の時には三組であつた。その後萬治二年二月諸士を金澤に召返したが、御馬廻十八人外に番頭二人を残された。爾來この制連綿し、後世では御馬廻二十人・番頭二人となつた。

コマツウマハリバンガシラ 小松馬廻番頭 小松御馬廻御番頭は萬治二年根來善左衛門・今村助太夫の命ぜられたのが初である。是より連綿し、延寶五年三月十九日役料百石宛を賜はつた。

コマツオモテ 小松表 ↓キムシロ 蘭筵。

コマツガクモンシヨ 小松學問所 ↓シユウギドウ 集義堂。

コマツギヌ 小松絹 小松附近の製絹は、文明十一年道興准后の廻國雜記に、『もとをりを通り侍りけるに人のきぬを織るを見侍りて』とあるのを初見とする。前田利常が菟裘をこの地に定めるに及び、大に地方の産業を奨励したから、斯業も隨つて進歩したことであらう。前田綱紀以後には文獻漸く顯れ、寛文六年正月小松の絹判賃を金澤並に引上げられたることなどが見える。元祿十年の著である國華萬葉記の加賀の物産に、小松絲・同撰絲・同羽二重・奉書とあるに至つては、餘程有名になつたことが知られる。

コマツグチ 小松口 朝倉義景の鳥居與一右衛門に宛てた十月十三日附の感狀に『去月十七日於加賀國能美郡小松口合戦之時首一討捕云々』とある。これは永祿七年のことに係る。

コマツグンキ 小松軍記 一冊。一名小松軍談。慶長五年前田利長の軍が、能美郡淺井騷に於いて丹羽長重の勢と戦つた始末を記する。有澤氏の奥書に、この書丹羽家の側の記録だから、金澤の沙汰と相違する所少くないと云うてゐる。

コマツジアンソウドウ 小松寺庵騒動 明和中小松の眞宗東派本蓮寺が郡中で勢力を振はんと欲し、本願寺の御堂澗法庵と謀つて出訴した。その趣旨は、往時本山から能美郡二百二十餘村の惣道場を賜はつた祖師の畫像は、現に之を勸歸寺に傳へ、寺院は皆本願寺の直屬となつて、金澤の別院の支配を受けたい。それが爲に宗意稍もすれば動搖して、任